

井上赳の教材作法

田 中 瑩 一

はじめに

井上赳は大正一〇（一九二一）年八月から昭和十九（一九四四）年六月まで文部省に在職し、多くの国定教科書教材を執筆した。井上が執筆した教材は『井上赳先生國語讀本編修二十年功勞志』^{（註一）}所収の「井上赳先生作教材並びに作品目録」^{（註二）}にまとめられている。

井上が入省して最初に担当したのは『尋常小學國語讀本』^{（註三）}（『白讀本』）と呼ばれることもある。以下この呼称による。卷十以下の教材の作成であった。当時の教材執筆を回想して井上は後に次のように述べている。

「私は最初に「パナマ運河」その他数編を割当てられたが、「パナマ運河」にはずいぶんてこずった。そのころ日本にはまだパナマ運河に関する文献著述が皆無といってよい位だった。やっと農林省に「パナマ運河ニ関スル取調書」といったお役所風な三百頁位のパンフレットが

あって、それを借覧すると、これは工事中の調査であり、土木機械的な立場がかなり詳細に書かれているが、完成後の様子とか、いわんや運河通過の実感とかいったものは葉にしたくもない。国内なら出張視察ということもあるが、まさか南米までは問題ならぬ。実際に見たであろうという人々を物色してその話を聞いたり資料を借りたりして、ともかく書いてみたのであるが、何べん原稿を書き直したところで物になる代物でない。この位あと口のわるいものはなかったと記憶する。」^{（註四）}（ここで「パナマ運河」（『白讀本』卷十所載）の場合を取り上げて、資料が乏しかったこと、現地を見ることになわなかつたことなどの制約があつて不本意な執筆であつたことを告白している。とくに「完成後の様子」や「運河通過の実感」について言及出来なかつたことを心残りとしていた。

井上と同時期に文部省にあって、ともに『白讀本』の

教材作成にあたった高木市之助も、現地を見ないで執筆した「ナイヤガラニヤガラの瀧」、「京城の友から」、「トラツク島便り」などは、現地を見て執筆した教材「いもほり」、「麥打」などに比べて「生きがよくない」という評判だったと述べている。（註5） 教科書監修官として「外国を实地に見聞する」事は高木、井上共通の夢であった（註6）し、「読本の文章の作者は直接欧米の諸国を歴遊するの（註7）でなければその地の教材を執筆すべきでない」（註7）とも主張していた。

高木はまもなく文部省を去ったが、残った井上にはのちに図書監修官として初めての外国出張が認められ、大正一四（一九二五）年から同一五（一九二六）年にかけて国語教育研究のためにヨーロッパとアメリカを歴訪した。この出張について井上は後に次のように述べている。「イギリス、フランス、ドイツ、その他の国々、帰りにアメリカに立ち寄り、その国々の国語指導の实地を見ること、もつとも進んだ編集の国語教科書を調べ集めることが私の任務でしたが、一方かつて「パナマ運河」を書かされたにがい経験により、欧米の国々をできるだけよく見、その印象をこまかく記録することに力めました。後にあるひとのお世話で、出版の運びに至りました。

「祖国を出でて」の紀行（註8）がそれで、実は将来教材作成のための資料として書きとめたものでありました。（註9）

この「祖国を出でて」（以下『紀行』）に井上は、自

身が「将来の教材作成のための資料」となると考えた対象を中心に、訪れた先々の自然や人々の生活、都市インフラや行政の実際、音楽、美術、建築といった文化財等を克明に記録し、批評的な印象を記述している。

帰朝後、井上が右『紀行』を資料として執筆した教材には『農村用高等小學讀本』（註10） 卷一の「動物を愛せよ」、卷二の「ソコトラ島」、卷三の「デンマークの農業」、『小學國語讀本』（註11）（『サクラ讀本』と呼ばれることもある。以下この呼称による）卷十一の「欧州航路」、卷十二の「欧州めぐり」などがある。それらの教材には「外国を实地に見聞」した成果や「生き」の良さがどのように反映されているのであろうか。

井上はまた、『サクラ讀本』卷十に、自ら「あと口のわるい」作として評価しなかった『白讀本』卷十所載の教材「パナマ運河」を書き改めて再録している。この改訂は直接には『紀行』の記述にもとづいてなされたものではない（註12）が、『白讀本』以来の井上の研鑽、さらには欧米研修等によって得られた国語教材に対する識見が、そこに具現化されているであろう。それはどのようであるか。

一、『紀行』の記述は教材作成にどのよう（註13）に生かされたか

(1)「ソコトラ島」の場合

『農村用高等小學讀本』のために井上が執筆した教材の内、『紀行』の記述がもっとも多く取り入れられているのは「ソコトラ島」である。以下にその全文を引用する。

ソコトラ島（教材本文）

コロンボを去つて六日、我が船は既に印度洋の荒波を乗切つて、今夜あたりはアデン灣の入口にさしかゝるであらうといふ。船中我も人もさすがに心が勇む。

しかし波はまだ少しも其の威力を収める気色がない。否、昨日にも増して今朝はひとしほに荒狂ふ、ちやうど、「今日が最後だ。出来るだけ此の船を翻弄してやれ。」といふ意気込であるかの如く。——一萬一千餘トンの船體も物かは。打寄せる巨濤に、ど、ど、どと震動しながら、船首は乗上げて斜に空を指し、船尾は落ちて深く波の谷に沈む。と見れば、船體はふはりと波の背を越え、船首はやがて下方に落ちて前方の巨濤の腹中に突入せん勢。あはやといふ間もあらせず、波は濛々と船先に碎け、前甲板を洗ひ、餘沫は飛んで大空に花と散乱する。四顧茫茫、目路の限り漫々たる水であり、澎湃たる波である。近き波は山の如く岡の如く、遠きに随つて築山の如く盛砂の如く、果は幾千萬の魚群の如く續いて、遂に天空に一線を引く地平線に及ぶ。紺青

の水はあくまでも濃く、碎ける波頭はあくまでも白い。わけて船首をかみ、舷側をかすめ、船尾に散る波の白さは、そもく何にたとへよう。白雪といつても、此の純白に比すると尚遜色があるやうに思はれる。

何時まで荒狂ふ波ぞ。人々の心も今日は大分いらだつて來た。無事を祈り安息を希ふのも、初の間であつた。四日五日と此の荒波にゆられては、人も自然と意地を出さずにはをられぬ。躍れ波、狂へ波、よし自分も負けてなるものかといふ氣になる。船に弱い人々はともかく、少しでも船に自信を得て來た連中は、甲板を踏みしめ踏みしめ右往左往してみる。元氣のよい連中は、此の意地をデツキゴルフに發揮して、しぶきの中に勝敗を争つてゐる。

午前の間船は波にもまれた。午後になつても止む氣色がない。人並に意地を出して見た私も、いさゝか根負けして船室のベッドに横たはつたが、波に疲れてか忽ち快い午睡に陥つた。

ふと目がさめる。何といふ静かさであらう。船は今微動だにしない。起きざまに船窓から眺めると、海はまるで鏡のやう。紺青の水は太陽に輝いて、軽く船側にたはむれてゐる。機關の旋律的な音まで、何となくのどかに聞かれる。

「ずあぶん大きな島だ。」
といふ聲が甲板に聞えた。續いて人々のさゞめきの

聲がする。私は上着を取つて着るが早いか、甲板へと走つた。

船の左舷、南方凡そ十四五マイルの處に當つて横たはる一大島は、全く一木一草をとどめぬはげ山の連續であつた。左端は高いテール状、真中から右に及んで波状に高低起伏してゐる。熱帯の午後の太陽に照らされて茶褐色にひらめく山が、紺碧こんせきの空にくつきりと浮いて見える。或處は天空にかみつくやうにそゞり立つてゐる。或處はのこぎりの齒のやうに連なつてゐる。

何といふ恐しい山の形であらう。何といふものすごい島の形であらう。魔まの島とも死の島とも殆ど名状し難い形相であるが、しかも此の島の存在が、六日間の荒波にいらだち、疲れ果てた我々に、これ程の平和な氣分を與へ、安らかな慰藉しんげきを與へようとは。思へばかの印度洋の怒濤も、此の一島にさへぎられては、何の威力も發揮し得ないのである。ものすごい島の形は、これぞ佛の降魔の相、あたかも我々の船を守り顔に見える。

「ソコトラ島」の名は日本で知る人も少からうが、一度印度洋の波に苦しんだ者は、恐らく誰も永遠の記憶にとどめるに相違ない。

『紀行』の原文が右教材文と如何に符合しているかを確認するために、教材の冒頭と末尾に該当する『紀行』

原文を対照してみよう。

(教材冒頭部該当『紀行』原文)

八月五日、コロンボを去つてから今日は六日目、もうインド洋も九分は乗切つて、今夜あたりはアデン灣口にさしかゝるであらうといふ。船中我人もさすがに心が勇んだ。(『紀行』七八頁)

(教材終末部該当『紀行』原文)

何といふ恐ろしい島の相すがたであらう。何といふ物凄ものごい山の形であらう。魔の島とも死の島とも殆ど名状し難い形相であるが、しかも此の島の存在が数日の荒浪にいらだち、疲れ果てた我々にこれ程の平和な氣分を與へ、安らかな慰藉を與へようとは。——思へばかの澎湃ほうはいたるインド洋の怒濤も、此の一島にさへぎられては何の威力も發揮し得ないのである。物凄い島の形は、これぞ佛の降魔の相、恰も我々の船を守り顔に見える。

「ソコトラ島」の名は、日本で知る人も少からうが、一度インド洋の波に苦しんだ者は恐らく誰も永久の記憶にとどめるに相違ない。(『紀行』八〇頁)

原文がほぼそのまま踏襲されていることがわかる。引用を略した部分についても同様である。対象学年が高等科であることも考慮し、あえて手を加える必要を認めな

かつたのであろう。

この文章の主眼は、印度洋航行の荒々しさを描写し、そこを乗り切った後に合合ったソコトラ島が、異形でありながら船客に平和な気分と慰藉とをもたらしたことに ついて、その地形的な位置についての解説と合わせて、感動的な発見として叙述することにあつた。その「描写」と「叙述」こそが「実地に見聞」したことによつて書き得たことのものであつた。

ところで右「描写」部と「叙述」部とで井上はやや異なつた文体を採用している。「描写」部はいわゆる「漢文訓読」の流れを比較的強くうけた文体で、漢語や対句表現を多用し、音読を通して格調を味わうことが出来るように書かれている(第二、第三段落など)。「叙述」部はいわゆる「言文一致」の流れをうけた文体で、心理や事理の平明な説明をむねとして書かれている(第五、第六段落など)。(註13) 大正末期から昭和初期の時点で通行していた口語文の実態から見て、これら両種の文体を学習することは高等科生徒にとつて必要なことであり、この教材はその要請に応えるものであつたらう。

「漢文訓読」的文体(ないし漢文)で記述された先行紀行文と比べると井上の文体の時代的な位置がよくわかる。

成島柳北『航西日乗』

(註14)

十一月日曜晴

風起り船動ク

衆客房二入テ臥ス

者多シ

十五日金曜晴

(前略) 蓋シ亜喇比亜ノ海岸ハ概

ネ砂礫ノミニテ青ヲ見ズ 峰巒ハ肉無ク骨露ハ
レ剣ノ如ク牙ノ如ク 突兀トシテ心目ヲ驚カス

森鷗外『航西日記』

(註15)

二十三日、風未だ歇やまず。

二十四日、午後に至りて風歇む。晚、速^{ソコト}可^ト多^ヲ喇^ヲ嶋
を望む。山骨嶮岬、鋸齒の状を作す。

二十五日、水の平らかなること席のごとし。巨魚
波上に浮くを觀る。

二十六日亞丁港に至る。(中略)

万里船は過ぐ駭狼の間

征衫ここに來りて涙斑を成す

童山赤野 青草なし

あに風光の故山に似たる有らんや

両者とも、井上の『紀行』の場合と同じく、荒々しい印度洋を乗り切つて、異形のソコトラ島に出合い(柳北は直接には言及していない)、穏やかなアデン湾に入つて息をつくといった経過を記している。しかし、当然のことだが、明治期の紀行文と、井上の紀行文との間には文体上大きな相違がある。

明治期には、航行については「風起り船動ク 衆客房二入テ臥ス者多シ」、「万里船は過ぐ駭狼の間」と、また大陸や島の姿については「峰巒ハ肉無ク骨露ハレ剣ノ

如ク牙ノ如ク」「山骨嶮岬、鋸齒の状を作す」と表現されるに止まつていたものが、大正期を経過して井上の「漢文訓読」的文体に見られるような描写的な表現へと展開した。その果実がこの教材などを通して学校教育の現場に提供されたのである。

これに対して心理や事理の「叙述」にはそのような文体は適さなかった。異形のソコトラ島が、荒波を経てきた者に平和な気分と慰藉を与えたという実感に加えて、この島が地形的に印度洋の波を遮る働きをしているという事理を平明に伝えるためには、「突兀トシテ心目ヲ驚カス」とか「あに風光の故山に似たる有らんや」といった漢詩的な常套句は勿論、対句や律調からも自由でなければならず、「言文一致」的な文体をとることが必要だったのであろう。

井上と同時期の紀行文の例として芥川龍之介の「上海遊記」(註16)を見てみよう。

船が玄海にかかると同時に、見る見る海が荒れ初めた。同じ船室に当つた馬杉君と、上甲板の籐椅子に腰をかけてみると、舷側にぶつかる浪の水沫が、時時頭の上へも降りかかつて来る。海は勿論まつ白になつて、底が轟轟煮え返つてゐる。その向うに何処かの島の影が、ぼんやり浮んで来たと思つたら、それは九州の本土だつた。(中略)その内に隣の馬杉君は、バアか何処かへ行つてしま

つた。私はやはり悠然と、籐椅子に腰を下してゐる。はた眼には悠悠と構へてゐても、頭の中の不安はそんなものぢやない。少しでも体を動かしたのが最後、すぐに目まひがしさうになる。その上どうやら胃袋の中も、穏やかならない気がし出した。私の前には一人の水夫が、絶えず甲板を往来してゐる。(これは後に発見した事だが、彼も亦実は憐れむべき船酔ひ患者の一人だつたのである。)その目まぐるしい往来も、私には妙に不愉快だつた。(中略)海は昨日荒れた事も、もうけろりと忘れたやうに、蒼蒼と和んだ右舷の向うへ、濟州島の影を横へてゐる。

「上海遊記」冒頭部、玄界灘航行の記述である。ここにも、荒れ狂う海を乗り切つたあと、おだやかな海に出合うという教材「ソコトラ島」と同様の経過が書かれているが、船上の属目と己の心中があわせ表現されている。ここに見られるのは、明治以来、小説等を通して成熟してきたいわゆる「言文一致」の流れをうけた文体であつて、これもまた大正期の日本語が到達した一方の果実であつた。

なお、例文の引用は省略するが、「ソコトラ島」と同じように、「描写」部に「漢文訓読」的な文体を生かし、「叙述」部に「言文一致」的な文体を生かす書き方は、『農村用高等小學讀本』巻一の「動物を愛せよ」でも巻

三の「デンマークの農業」でも同様に認められる。

(2)「欧州めぐり」の場合

『紀行』を資料として『サクラ読本』のために井上が執筆した尋常科用教材では、「漢文訓読」的な文体は姿を消し、平明な「言文一致」的な文体に統一されている。尋常科用であるために、情景を描く場面が少なく、事態の展開や人の行動と心情を叙述する場面が多くなったことに加えて、この読本が使用されはじめた昭和八年頃には「漢文訓読」的な文体自体が次第に用いられなくなってきたことにもよるのである。「欧州めぐり」のうち「イタリヤめぐり」の一節を引用して検証してみよう。

「イタリヤめぐり」(教材本文)

フロレンスにイタリヤの古美術をたづねてから、ベニスへ向かはうとする汽車中のことであつた。もう餘程目的地へ近くなつた頃、或驛で停車すると、どやくと此の國の青年が四五人はいつて來て、私のそばに腰をかけた。しきりに「ジャポネーゼ、ジャポネーゼ。」とささやくのが聞える。イタリヤ語を知らぬ私にも、それが「日本人」といふ意味だと見當はつく。すると、一人の青年が私の前に立つて、

「あなたは日本の方ですか。」

と、はつきり日本語で言つた。今、各國で日本語

の研究が盛であることは聞いてゐたが、ヨーロッパに來て、外國人に日本語で話しかけられたのがこれが始めてである。

「さうです。」

「私は日本語を二年程勉強してゐます。」

かなり正しい発音である。他の青年たちは、ここにこしながら、半ば不思議さうに、私とかの青年の顔を見くらべてゐた。

該当する『紀行』原文

藝術の古都フィレンツェを出發してヴェネチアへと旅立つ。(中略)右は笑ふが如きならかな岡、左は遙かにアルノの平野が展開して、其の果に春霞を着た遠山が夢のやうに連亘する。(中略)どやくと私たちのコンパートメントに、四五人の伊太利青年が詰掛けて、席は忽ち一杯になつた。彼等は一齊に私たちを見て「ヤポネ、ヤポネ」私語いては、袖を引合つてゐる。(中略)其の一人の青年が私たちの真向へに移つて、

「あなた方は日本のお方でいらつしやいますか。」

と、朗讀口調の、然しかなり鮮かな發音の日本語で持ちかけた。さうして他の青年たちは、此の異國の言葉が私たちにどういふ効果を與へるかを確めるやうな顔附で、私たちを見まもつた。(『紀行』五六三〜五六五頁)

原文の車窓風景の描写部に用いられていた「漢文訓読」的な表現は教材にはとり入れられていない。

二、教材「パナマ運河」はどのように書き改められたか

『サクラ讀本』編集の基本的立場について井上は「教育の児童主義が、世界の大きな動きであることをすでに知った以上、児童の心理、生理、生活を教育的に教科書の正面に押し出さなければならぬと考えました。」
(註17)と説明しているが、教材「パナマ運河」の改訂においてその考えはどのように反映されているのであろうか。『白讀本』の時代（大正後期）から『サクラ讀本』の時代（昭和初期）へと、通用の日本語口語文の文体自体も変容しているため、改訂の背後には一般的な文体の変容に対応しているところもあるが、教材としての配慮からなされたと思われる改訂のあとをたどることを通して、井上の教材観の深化のあと、ないしは『サクラ讀本』の特質の一端をとらえることができるだろう。

両教材の冒頭と末尾を対照して考察してみよう。

『白讀本』所載「パナマ運河」冒頭

北アメリカが南アメリカに続く部分は、パナマ地峡といつて、地形がきはめて細長くなつてゐる。

此の地峡に造つた運河が、世界に名高いパナマ運河である。

パナマ地峡は一帶に小山が起伏してゐる上に、地層にはかたい岩石が多い。其の外にもいろ／＼の理由があるので、此の地峡を切通し、平かな掘割を造つて太平大西兩洋の水を通はせることは到底出来ぬ事であつた。そこで此の運河は、非常に變つた仕組に出来てゐるのである。

『サクラ讀本』所載「パナマ運河」冒頭

世界地圖を見て、誰でもちよつと不思議に思ふのは、北アメリカと南アメリカの二大陸が、まるで紐のやうに細長い地峡でつながつてゐることです。ちやうど船でも引きのぼした時のやうに、切れさうで切れないといつたかつかうです。

若しあそこが少しでも切れてゐたら、自由自在に船も通れるでせうが、如何に細いにしてもそれが續いてゐたのでは、はる／＼南アメリカの南端を大廻りしなければなりません。だから、あそこへ運河を作らうといふことは、何百年も前から考へられたことでした。

ところで、あの細長い地峡は、地圖で見れば何でもないやうに見えるながら、實は兩大陸をつなぐ火山地帯で、至る所岩だらけ山だらけなのです。かうした場所を掘割るといふことは、並大ていの仕事ではありませぬ。計畫は何へんか立てられ、

工事も失敗をくりかへしましたが、しかしとうく出来上つて、今では、大きな商船でも軍艦でも、通り抜けられるやうになりました。世界に有名なパナマ運河といふのがそれなのです。

しかし、いくら人間や機械の力が進んだにしても、此の岩だらけ、山だらけの土地を掘割つて、海面と同じ高さに水を通すことは、中々出来さうにありません。だから、パナマ運河は、すこぶる變つた仕組に作らなければならなかつたのです。

『白讀本』所載「パナマ運河」末尾

米國が此の運河を造るに成功したのは、主として、最新の學理を應用したからであつた。衛生の設備をよくして危険な病氣を根絶し、幾萬の従業者の健康をはかつた事や、ほとんどあらゆる文明の利器を運用して、山をくづし、地をうがち、河水をせき止めた事など、一としてそれならぬものは無い。昔、太平大西洋の間を往來する船は、はるか南アメリカの南端を大廻りしなければならなかつた。しかしパナマ運河の開通以來は、此の不便が無くなり。したがつて世界の航路に大きな變動を生じたのである。

『サクラ讀本』所載「パナマ運河」末尾

此の運河を作ることに成功したのは、アメリカ合衆國でした。それがために、毎日三萬何千人の

人々が働き續けて、十年といふ長い月日がかゝりました。あらゆる人間のちをしばり、機械といふ機械を使つて、熱帯の密林を開き、氣ちがひのやうにあふれる川を制し、頑固な岩山を切開いて、巧みに此の文明的大工事をしたげたのです。出来上つたのは、我が大正三年八月のことでした。

しかし、此の大工事の裏には、もつと偉大な仕事がありました。それは、目に見えぬ熱帯の傳染病との戦でした。もと此の地方に流行したマラリアと黄熱病が、かつては何萬といふ西洋人の命を奪つたこともありす。殊に、一度黄熱病にかゝつたが最後、人は熱にうなされ、黄色くなつて、ばた／＼死んで行きます。幸ひ、此の病氣のなかだちをするものが、蚊であることが分かつたので、水たまりを乾かし、みぞを埋め、水道を設け、下水を完全にし、道路を鋪装して、昔の不健康地を一變することに成功しました。若し此の仕事が進まなかつたら、よし何萬何十萬の人がこゝに送られて來ようと、パナマ運河は完成しなかつたかも知れません。

兒童の心理や生活に即した表現へと改訂しようとする意図のくみ取れる箇所を、右に例示した部分を中心に、幾箇所か取り出してみよう。（『白讀本』の本文には○印、『サクラ讀本』の本文には◎印を付した）

(1)

『白讀本』では第三者的、觀察者的な視点に立つ、冷静で理詰めの説明がなされているが、『サクラ読本』では当事者的な視点に立ち、人の行為や感情にもかかわった説明がなされており、総体として「人間的な」教材になっているということができる。

○北アメリカが南アメリカに続く部分は、パナマ地峡といつて、地形がきはめて細長くなつてゐる。(觀察者的な視点から書き出している)

○世界地圖を見て、誰でもちよつと不思議に思ふのは北アメリカと南アメリカの二大陸が、まるで紐のやうに細長い地峡でつながつてゐることです。(「誰でも・・・思ふ」など人間的、主体的な反応から書き出している。)

○米國が此の運河を造るに成功したのは・・・(たずさわつた人への言及はない)

○此の運河を作ることに成功したのは、アメリカ合衆國(がしやう)でした。それがために、毎日三萬何千人の人々が働き續けて、十年といふ長い月日がかゝりました。

(工事に従事した人数、工事の年月を取り上げている)

○衛生の設備をよくして危険な病氣を根絶し、幾萬の従業者の健康をはかつた(行為の実際についての言

及はない)

○しかし、此の大工事の裏には、もつと偉大な仕事がありました。それは、目に見えぬ熱帯の傳染病との戦(いくさ)でした。・・・(以下實際を詳述)・・・道路を鋪装(はき)して、昔の不健康地を一變することに成功しました。若し此の仕事が進まなかつたら、よし何萬何十萬の人がこゝに送られて來ようとも、パナマ運河は完成しなかつたかも知れません。(難工事を裏で支えた人事的な貢獻の一つとして傳染病との戦いについて詳述している。)

○今太平洋の方から此の運河を通るとする。船は先づ海から廣い掘割にはいる。しばらく進むと水門があつて、行くてをさへぎつてゐる。近づくと、・・・

○今、太平洋の方から此の運河へ入るとしませう。最初は・・・行くと、向かふに大きな水門が現れます(井上は『白讀本』で「運河通過の實感」に言及できなかつたことを心残りとしていたが、『サクラ読本』では運河を通過する人の視点から書いている。)

(2)

○児童の生活感に即した表現が多用されている

○パナマ地峡は一帶に小山が起伏してゐる上に、地層にはかたい岩石が多い。

○地図で見れば何でも無いやうに見えながら、實は兩

大陸をつなぐ火山地帯で、至る所岩だらけ山だらけなのです。

○地形がきはめて細長くなつてゐる。

○まるで紐のやうに細長い地峡でつながつてゐる

○ちやうど飴でも引きのばした時のやうに

○ちやうど團子の串刺しのやうに

○ほとんどあらゆる文明の利器を運用して、山をくづし、地をうがち、河水をせき止めた

○あらゆる人間のちゑをしぼり、機械といふ機械を使つて、熱帯の密林を開き、氣ちがひのやうにあふれる川を制し、頑固な岩山を切開いて、巧みに此の文明的大工事をしとげたのです。

(3) 児童の心理に即し、スリル、意外性あるいは感覚的な反応を誘うように書かれている。

○此の高い湖と低い掘割を何の仕掛もなしに連結すれば、湖の水は瀧のやうに掘割へ落込んで、とても船を通すことは出来ない・・・

○此の高さの違う水面をどういふうにれんらくするか、ここがパナマ運河の構造の一番面白いところですよ

○ガツン湖といつて、廣さが霞が浦の二倍以上もある

大きな人造湖で、・・・

○これは日本の霞浦の二倍もあらうといふ大きさで、しかも人間の力で出来た湖と聞くと、全く驚かされます。

○一度黄熱病にかゝつたが最後、人は熱にうなされ、黄色くなつて、ばたぐ死んで行きます。

おわりに

以上、本論文では井上超の執筆した教材を観察することを通して井上の教材観の一端を検証することを試みた。一では井上がヨーロッパ各国を歴訪する間に「教材作成のための資料」として記述した著書『印象紀行 祖國を出でて』の文章が教材としてどのように生かされたかを見た。井上の紀行文は、実地に見聞して心打たれたこととがらについて、「描写」部分は格調に富むいわゆる「訓読」的な文体で、人事、心理、事理等の「叙述」部分はいわゆる「言文一致」的な文体で書かれていた。高等科用の教材では原文がほぼそのままとりいれられた。生徒たちはこの二系統の文体を含む教材を繰り返し朗読し、場合によっては暗唱するなどして学習した。次期の国定読本『サクラ讀本』の高等科用は編集されないまま制度が改まったため、この高等科用読本は長く使用されることとなった。この読本の教材文は国民の文体感覚の

形成に多大の影響を与えたものと考えられる。

二では井上が『白讀本』のために執筆し、不本意な出来としていた教材「バナマ運河」を、『サクラ讀本』のために改訂したあとをたどることを通して、児童の心理と生活に即して行こうとした井上の教材観が、どのように具現化されているかについて検証を試みた。

註

- 1 昭和十八（一九四三）年・井上越先生國語讀本編修二十年記念會刊。
- 2 この場合「作」といっても、教材として教科書に載るまでには文部省内の諸会議での検討が加えられているわけで、厳密には「提案原稿の作成」を意味しているとしなければならぬであろう。
- 3 大正七（一九一八）年に使用開始された国定第一期の読本。
- 4 「讀本編集三十年」、昭和二六（一九五二）年七月・刀江書院刊『國語教育講座』第五卷所収、古田東朔『国定教科書編集二十五年』、昭和五九（一九八四）年・武蔵野書院刊、九二頁。
- 5 『尋常小学国語讀本』、昭和五一（一九七六）年・中公新書、九〇頁。
- 6 同書一〇四頁。
- 7 同書一五五頁。
- 8 井上越著『印象紀行 祖國を出で』、昭和六（一九三一）年・明治圖書刊。

9 「国定讀本の編集」、昭和三四（一九五九）年・「実践國

語」連載、『国定教科書編集二十五年』三一頁。

10 昭和二（一九二七）年に使用開始された国定読本。

11 昭和八（一九三三）年に使用開始された国定第三期の読本。

12 『紀行』は大正十五（一九二六）年五月二十五日、ヨーロッパを離れてアメリカに向かうところで終わっている。井上は同年七月二十二日には帰国しており、バナマ運河訪問の余裕はなかつたものと思われる。井上の他の発表物にもバナマ運河を訪れたという言及は見当たらない。

13 日本語の口語文に「漢文訓読」の流れをうけた文体ないし文脈と、「言文一致」の流れをうけたそれとの二つの流れを認める見方については、齋藤希史『漢文脈と近代日本』も一つのことばの世界』（二〇〇七年・日本放送出版協会刊）に示唆を受けた。

14 明治一四（一八八二）年「花月新誌」連載、新日本古典文学大系5「海外見聞集」、二〇〇九年・岩波書店刊、二六八頁。

15 明治三二（一八九九）年「衛生新誌」連載、新日古典文学大系5「海外見聞集」、二〇〇九年・岩波書店刊、四二九頁、原文は漢文。

16 大正一〇（一九二二）年「大阪毎日新聞」連載、後に『支那遊記』、大正一四年（一九二五年）・改造社刊に収められた。『芥川龍之介全集第八卷』、一九九六年・岩波書店刊、六〇八頁。

17 「国定讀本の編集」、『国定教科書編集二十五年』三七頁。